

06年度日中友好協会岡山支部総会ひらく ——鶴の七夕飾りをつくる——

6月11日(日)午前10時から12時まで、協立病院コムコムで総会がひらかれました。参加者は以下の24人でした。
青木正(太極拳指導員)、青木富美子(太極拳指導員助手)、青木正美(太極拳日本本部指導員)、稲葉泰子(共産党岡山市会議員)、井上愛子(孤児訴訟を支える会副会長)、宇野武夫(日中岡山支部支部長)、大森久雄(日中倉敷支部支部長)、大森輝宏(孤児訴訟原告団副団長)、神吉智也(日本語教室講師)、小林軍治(日中岡山支部副理事長)、真田紀子(日中岡山支部理事)、澤山博一(日中岡山支部副理事長)、下河部行輝(中国語講座運営委員長)、正司金一(地域人権:AALA)、砂子和正(日中岡山支部監査)、高杉久治(孤児訴訟原告団団長)、高橋公正(日本ベトナム友好協会県支部長)、高見英夫(孤児訴訟原告団事務局長)竹内和夫(日中



480
2006/06/25



岡山支部理事長)、武田英夫(共産党岡山県会議員)、西森文字(総社日本語教室世話人)、宮地義男(日中倉敷支部事務局長)、吉崎二郎(年金者組合湊分会)、鄭盧烙(岡山県華僑華人總會事務局)
参加者ひとりひとりが、九条茶を飲みながら、自己紹介をかねて全員発言。協会本部と岡山市職労と日中福井支部からメッセージが届きました。
午後から新西大寺町に飾られる平和の七夕、折り鶴の吹き流し作りがあり、みごとな出来ばえに10人の参加者はよほこびいっぱい。
今年には青木正さんの工夫がみられ、輪に鶴をひっかけるだけで1時間少しの時間で4本が完成。もちろん、鶴を折って糸に通す作業には数十人の手がかかっています。
竹内
○ 総会での発言内容は、次号でご紹介します。
孤児訴訟原告団団長の高杉さん、事務局長の高見さんの発言を予定しています。

岡山高教組定期大会で 「支える会」事務局長が 新署名の訴え

六月十一日、岡山労働福祉会館で開催された第六四回定期大会は、約一四〇名の代議員が参加しました。この大会は、「憲法、教育基本法、子どもの権利条約にもとづく民主主義教育を推進しよう。：戮え子をふたたび戦場に送るな」の原点に立って平和のとりくみをすすめるよう。」などのスローガンのもと活発な討議がなされました。

午後休憩に入る前に、支える会事務局長の小生から、これまでの中国「残留孤児」問題に対する理解を拡げる取り組みや、署名・募金活動に感謝するとともに、新署名(東京地裁あての公正判決を求める)についての協力をお願いしました。
この日の署名一五七筆、募金は、九一四三円があつまりました。岡山高教組関係の署名は、



大安寺分会と岡山南分会からそれぞれ五〇筆が届けられ、全体で三〇〇筆を超える数になりました。ありがとうございます。
小林

中国「残留孤児」問題に関しては、(2)民主主義教育の確立、(6)平和と民主主義の擁護の二ヶ所で触れられています。
(2)では、教研集会(第二次教研)の所で青木先生の「中国残留孤児の足跡、中国残留婦人・孤児の過去・現在・未来」の報告と同行された中国残留孤児の方の貴重なお話もありました。」と記されています。
(6)では、八月、中国残留孤児問題を考える「岡山県の開拓団跡地を訪ねる日中友好の旅」が高教組教研の一つとして企画され、高教組からも三人が参加し、開拓団跡地を訪ねたり、ゆかりのある小学校の教職員・子どもたちと交流を深めたりしました。」と述べられています。

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhong.web.infoseek.co.jp
新・メールアドレス
rizhong86@hotmail.co.jp



日中・岡山 第77回文化講座 さんかくウィーク2006参加行事 「日本と中国の子育て」 《中国から見た日本の三歳児神話》

男女のあり方を考える運動の男女共同参画事業。
日中の国際的な視点から、子育ての課題を通して考える講座を作りました。少子化の進むたいへんな状況の今の日本に、問題提起をいただくお話です。充実したお話になること請け合いの講演会にご参加下さい。
講師*姜波氏
(川崎医療福祉大教授・社会学)
とき*6月24日
2時~4時
ところ*さんかく岡山
会議室(表町3丁目)
参加費*無料
是非ご参加をお申し込みを...

「残留孤児」裁判

第10回口頭弁論を傍聴



五月二十四日裁判所に行きました。めつたに入らぬ建物は少し威圧感を覚えました。中国残留孤児裁判傍聴のためです。

高杉さん大森さんと、弁護士とのやりとりを、手元にある資料“個人史”を見ながら聞きました。なんと理不尽など、胸が押しつぶされそうでした。

高杉さんは四歳で中国に取り残され、日本語しやべるなといわれ、いじめにあい、学校へは中国人として、就職にさいしてはやむなく中国国籍をとりました。

一九七二年日中国交回復を知り、日本は必ず自分を探してくれる、日本に帰れる、と希望をもちました。しかし、何の音沙

汰もなく、自分で手紙を書き、手がかりを探し、やっと日本に帰国。日本語が話せない事が壁となり、不安な毎日。就職も自分で探し、中国で働いていた林業とは全く関係のない鉄工関係の仕事につきます。

私たちが家族は長岡県住に10年くらい住んでいました。転居した直後、高杉さんが入居され、その後の様子を、夫や生活指導をされていたその当時の町内会長さんを通して聞いていました。

文化の違いから困地の中になかなかなじめないこと、言葉がわからず理解し合えないこと等々。夫はできるだけ支援をしようとよく言っていました。日本人とし

て見捨てられ、日本にやっと帰ってきたら、日本に又見捨てられるのでしょうか。日本語教育、就職の世話、安定した老後。日本政府はちゃんと取り組まなければいけない事だと思えます。

戦争という悲しい出来事がこういう人を作ってきたのです。二度と戦争を起さずにはいけません。

又、中国人の養父母の事を聞くにつけ、日本人である私たちが子供をひきとり、親身になって育てることが出来るのだろうか？中国人の人たちの心の大きさ、やさしさに感謝します。

最後に高杉さんが唯一、日本語で話された一部を紹介しま

す。悲痛な叫びです。

私は自分が日本人である事を知った時から、日本人である事を忘れた事はありません。日本は祖国です。祖国で暮らす事が長い間の夢でした。ようやく永住帰国できたのは、47歳の時でした。今、年金だけでは生活できませんし、なぜ、残留孤児であるといったたけでこんなに苦しまなければならぬのですか……」

高杉さんと同様の苦しみを味わってこられた大森さん、お身体大切にお過ごしください。

武田道子



*ジャワ島地震支援 街頭募金へ

岡山YMCA、日本ユニセフ協会県支部が申し入れて岡山県国際交流団体協議会加盟の九団体が、6月3日ジャワ島地震支援の街頭募金を行いました。一時間の短時間で市民の関心が高く、総額15万1千589円が集まりました。支部から2人が出て4986円を集めました。

とりわけ、ユニセフの子どもたちががんばって澄んだ高い声で呼び

募っていた。



姜波先生による中国事情 ⑤

国際マラソンと大連の発展

十九回大連国際マラソン(1987年から)は10月30日に開催された。この日は爽やかな秋日和で、アジアで最大だと言われ、大連の誇りでもある星海広場は早朝から人で埋まっていた。マラソンの参加者、観戦者、同伴者、コーチ、主催者、スタッフなど何万人も集まっていた。鮮やかな芝生に覆われた広場は赤、黄色、青など多彩なスポーツ

ウエアで虹色に染まっていた。ここは今回マラソン大会のスタート地点となっていたのだ。今回のマラソンは初めて国際マラソン連盟の許可を得て「国際マラソン」に昇格したため、特別な意味があった。今まで中国では各地でマラソンが行われていたが、国際マラソンと名乗れる都会は北京、アモイに次いで大連は三つ目という。

今回の大連国際マラソンは六つの種目で11の種別の賞が設けられた。フルマラソン(約42キロ)、ハ

ーフマラソン(約21キロ)、駅伝(約42キロ)、車椅子マラソン(男子約42キロ、女子約21キロ)、10キロの部、市民および観光客小マラソンの部(4・2キロ)となっていた。7447名の参加者には、112名のプロ選手を除いて、24の国や地域から330名の外国人が含まれていた。車椅子マラソンの部では合計20名の選手が参加したが、うち4名が外国人選手だった。健常者と障害者の合同マラソンなので、大会組織委員会では安全で円滑な大会を目指して細心の注意を

かけ、行きかう市民の笑顔と温かい気持ちを引き出しました。

今年も表町商店街と 駅前商店街に 折り鶴

戦争と戦災犠牲者への鎮魂の思いと平和への願いをこめた第8回平和七夕まつり」の開幕です。(6月15日〜7月15日)ぜひ一度ご参観ください。商店街の人たちの多くのご協力をいただいた催しです。6月29日の岡山空襲の日を中心に、多くの団体が多彩な催しを繰り広げています。これらの行事へもご参加を(ご希望があれば、詳細を送ります)

向で検討することになった。

夏徳仁市長は授賞式において年々国内の参加者が増えるだけでなく、外国人選手も増えているため、大連国際マラソンは大連市の知名度を高め、国内外の観光客を多く呼び込んだ」と大会の位置づけをした。特に今大会において日本企業を始めとして多国籍の企業の支援を得て、大連市と日本企業の交流が深まった」と褒め称えた。

今後大連国際マラソンは大連国際ファッションフェスティバルと同様に大連の発展と振興を促していくだろうと思う。

(川崎医療福祉大学教授)

次回の新聞送付作業は7月3日(月)午後1時半、民主会館2階で行ないます。前回お手伝いくださった方です。

和
内林山垣
竹小澤三

